

「ひとはなぜ戦争をするのか」の人間学—平和をいかに構想するか?—

①哲学者アランの反戦・平和主義から考える

【引用集】

2016年6月30日 京大人文学研究所 田中祐理子

一手がかりとして：小田実『『殺すな』から』（1976年）

（前略）日本人の多くが、私自身をふくめて、この気持ちを強くもつようになったのは、やはり、空襲の被害をあっちこっちでもろに受けたからで、そのもっともきびしい体験が原爆体験であった。そんなことは今さらくり返していうまでもないことだが、いくさのまえで、そして、圧倒的な武力のまえで、私たちはまったく無力で、ただ「殺すな」と必死に叫ぶよりほかはない。（中略）

／「殺すな」から始めて、「平等」、「自決」に至り、「第三世界」にまでたどり着く。その過程で、私の「殺すな」は、様々な現実と原理の挑戦を受けてボロボロになる。（中略）

／答え方の基本にあるものを書いておこう。ひとつは、この問題を考えるときに、現実の「殺すな」、「殺せ」がせめぎあうたたかいの現場を離れて考えてはならないということだ。

（所収：『「難死」の思想』岩波現代文庫、2008年）

—アラン『マルス、あるいは裁かれた戦争 Mars, ou La guerre jugée』（1921年）

（日本語訳：『裁かれた戦争』白井成雄訳、小沢書店、1986年）

【戦争の実体験から】

① ある新聞に、一家の父で、その勇猛ぶりを二度も表彰された歩兵の話が載っていたが、彼は食料を携帯して塹壕に戻り、危険を一時避けるために待避壕に入り、不運にもそこで寝込んでしまった。彼は敵前逃亡の罪に問われ、ついに銃殺刑に処せられた。この話は本当であろう。というのも、同様の話を私はいろいろ耳にしたからである。私が驚いたのは、この話を記事にした記者が、こうした処罰は残虐で正当化しえないと読者に訴えようとした点である。彼は間違っている。なぜなら、残虐で正当化しえないのは戦争それ自体であり、一旦戦争を認めれば、この処罰方法も認めねばならない。／（中略）言語道断な即決処刑も、戦争それ以上に私を驚かせはしない。というのも、そうした処刑は戦争が必然的に生み出すものだからである。戦争はある意味で正義と人道に合うものだという論を、黙って聞き流したり、受けいれたりしては決してならないのだ。（「ゲームのルール」）

② 戦地から帰還した一青年が私にこう言った。「いくら戦争のことを飾らずに話そうとしても、どうしても飾りすぎてしまいます。そして我々の話には耳を傾ける子供たちはいつも戦争をしたがるようになります。いっそ何も話さないほうが良いでしょう。」だがこの沈黙の限りない広がりこそ最良のものだったのであり、雄弁家には恐るべき徴（しるし）だったので。私は今にしてははっきり解るのだが、若者たちはこの点をはっきり理解していたのだ。演説はこの広い沈黙の空間を満たすことはできない。（「メカニズム」）

③ 近視眼的人間よ。この見事な軍隊組織がどのような効果をもたらすか、最後までその跡を追ってみる必要があったのだ。すなわち、人間は徹頭徹尾軽蔑されると、最後には、どんなに頭の弱い者でも、世論や先例に従い、大胆に行動する力が湧き上るのを感じるものなのだ。そして、部下を軽蔑することにかけては実に巧妙な上官を、勇氣ある行動と態度を示して、凌駕するチャンス待ちを待たうけるのだ。（中略）こうして、徹底的に抑圧された人間の尊厳は驚くべき反撥力を示す。そうだ、組織の上から下まで、上官は常に軽蔑し、部下は常に見返してやろうと夢見ている。そして彼らは

突撃する。最下位の最も軽蔑された者が常に先頭に立つのだ。これこそ操兵術の要求するところである。（「人間の尊厳」）

④ 私はいわゆる健気な手紙をたくさん読んだ。それらは確かにある意味で健気なものだった。その内の幾通かはおく親しい若い友人から来たものだった。彼らは皆、殺されてしまったか、あるいはそれに近い経験をしていた。私は彼らの手紙をすぐに焼き捨て、返事を出さなかった。なぜなら、もし出すとすれば、次のようにいわねばならなかっただろう。（中略）なぜこの私を慰めようとするのか。なぜ、自分たちは人生を愛していた。命を投げ出すのは辛かったと、最後に私にいつてくれなかったのか。君たちは世間皆に対し、「主よなぜ我を見捨て給う」との非難の言葉を残すべきだったのだ。君たちはもう少し手厳しくしても良かったのだし、何よりも正しくあるべきだったのだ。君たちには、人を欺いて慰めるような権利は多分なかったのだ。女性に対してさえそうだったのだ。この嘘が、十年もたたぬうちに、また百万の青年を殺しかねないことになるのだ。（「自己欺瞞」）

【「戦争＝避け難いもの」、「必然」「事実」という思考との対決】

⑤ 避け難い未来という、崇拜されているのか呪われているのか解らないあの不吉な思想を、あらゆる角度から検討しなければならない。（中略）私が気づいたのは、最も深遠な数学とか、数学を基本とする物理学によって、決定論を根本から正しく認識しなかった人々は、紋切型の決定論を手放しで喜んで受入れるということだ。彼らは十分理解しないままに決定論に惚れこんでいるのだ。彼らにとっての決定論とは、表面的合理的に見えるが、実は迷信家の胸にもつばら訴えやすい、宿命論にすぎないのだ。（中略）彼らは荒々しくこう言い放つのだ。戦争が起こった以上、それは避けられなかったのだ、と。これはまさしく宗教的本能と固く結びついた宿命論そのものだ。要するに、彼らが神のおぼしめしを信じようと、あるいは国民の集団本能、歴史的な原因、あるいは単に政治的原因を信じようと、いずれの場合も、ここに見られるのは受け身で苛立っている人間だ。（「決定論」）

⑥ 狂信とは、いうまでもなく、人間が自分の手で実現する恐るべき宿命の感情に他ならない。（中略）／私はといえば、あの悲しい戦時中、熱っぽい信念をもって同じ言葉で繰り返し説かれたあの専制的な意見を、幸運にも遠く離れて耳にせず済むことができた。ほとんどの人にとりついたこの頑固な宿命論は二十年来の友情を冷却させ、沈黙させるものであったが、距離を置いて見ると、こうした事態を考察する正しい道が私には間接的に解るのであった。その道とは、最悪を信じ、そして希望を持つようとする人々を頭から憎む、あの奇妙な怒りをまず解明することであった。（「狂信」）

⑦ 私は彼らを憎むつもりは全くない。彼らを理解しようとしているのだ。彼らの心の奥底に見られ、彼らが本気で願っていることは、それは全面的隷属であり、悪しき結果をもたらす常に陰気な運命の崇拜である。私は彼らの内に、平等、正義、平和、一言で言えば大胆な勇気に反対する奇妙な情熱を認めるのだ。（「悲劇」）

⑧ 人間性という言葉には多くの意味がこめられている。あらゆる意味がここに集約されている。なぜなら、一つの考えしか持てない人は常に誰かに危害を加えるであろう。憎悪とは狂信であり、狂信は教養の貧しさの印だと思えば間違いない。彼ら是对立する真理、あるいは並列する真理の影が現れるだけで驚いてしまう。私はといえば、人殺しにまで突き進むこれら無謬の徒を検討してみ、到る所に術学の徒を認めるばかりであった。（「教養」）

⑨ ここにツルハシのように手段、道具とみなされる一個の人間が存在する。なるほど仕事の際、故意にツルハシを破損はしないであろう。しかし摩滅するのは仕方がない。一週間に幾本となく、冷然とツルハシは取替えられる。この人間は他の者によってツルハシと見なされたのだ。人的資源という思想自体犯罪的である／こうした指摘を耳にした気前の良いブルジョアが、「人殺しは戦争の大原則だ」と答えた。私はこの答えを再度引用してもよい。ここで私は苛立つつもりはない。苛立てばこれまた戦争である。彼の考えも一つの意見であり、普通には当然とされる意見である。ただし、そうした意見を口にする人間が、せめて自分自身でその意見を考え出し、心に抱き、他人のせいにはしないことだけは願いたい。私はといえば、いつも眼に浮かぶあの屍、絶対に埋葬したくなかったあの屍を前にして、逆の意見を抱くのである。すなわち、この世のいかなる人間にとっても、他人の死を当然かつ不可避手段とみなしうるような目的は絶対に存在しないのだ。(中略) 私は自分一人で一国民全体の意見を決定するつもりはない。むしろ、今までもそうしたように、国民の意見に従うであろう。しかしまず、私は国民の意見というものが存在することを望むのである。(「屍」)

⑩ 賢者が私をさえぎり、こう言う。「事実を否認することは正しい精神のすべきことではない。そうではなく、事実を確認し、それに順応することだ。戦争は一つの事実である。それが善か悪かと問うても無駄である。」／確かにそうだ、賢者よ。君は人類が科学に酔い痴れたここ二、三世紀の申し子なのだ。(中略) 政治は群衆の迷蒙でしかなく、個人は奴隷にすぎないのか。そうでないとすれば、世論の形成にあたって、個人が自分一人で、自分の力量で判断を下すべき瞬間があるはずだ。それも、皆と同じ考えしかもてない狂信家連の方法に依ってではなく、孤独と自由を意志的に守る人間の存在を前提とする、あの真に科学的な方法に依ってである。要するに、世論が戦争を可とするか否かを知る前に、自分が戦争を可とするか否かを知らねばならない。その際、私自身の思想と感情以外に、私を左右する人為的事象は存在しない。私は主権者なのだ。私が将来について何を予想するかではなく、何を望むかが問題なのだ。純粋に倫理的な問題なのである。(「主権者」)

【アランの呼びかけ＝反戦という意志を持つこと。完結していない「殺すな」の挑戦】

⑪ 戦争が人為的な、純粋に人為的な事象であり、その一切の原因が人々の意見にあることをしっかり自覚しよう。そしてこの際、最も危険な意見とは、戦争は切迫しており、不可避だと、皆に信じこませる意見であることに注目しよう。(中略) ここに有害な一つの意見があるとする。この意見は場合によっては真実なものとなるかもしれないが、それは大多数がその意見を心に抱いた場合に限られる。以上を言いかえるなら、種々の意見がからみあって作られている人間界の事象の場合は、真実は確認されるものでなく、作りあげられるものだということである。だから認識するだけでは十分でない。判断という美しい言葉のもつ最上の意味で、我々は判断を下さなければならない。／この迷妄に対抗する証拠を探してはならない。自由な人間が戦争反対を表明しない限り、証拠など存在しないのだ。だがもし君が戦争反対を決意すれば、それは強力な証拠となろう。だから種々の証拠に助けを求めず、松葉づえにたよらず、一人で歩くがよい。君自身の内心の指示に従い、主権者として決定を下すがよい。現実ではなく、理想が問題となる時は、このように振舞わねばならない。精神的譲歩は一步もたりともせず、固く戦争を否定せよ。戦前も、戦中も、戦後もそうすべきだ。なぜなら、人々の賛同こそ戦争に生命を与えるものであることを、君はよく承知しているではないか。何よりもまず戦争に養分を与えないことだ。(「判断」)

⑪ (前略) ジャン＝ジャック・ルソーが示したように、最強者に従わねばならないということは道徳秩序の問題では全くない。それは一つの事実にすぎない。最強者が最強でなくなれば、それまでである。また、この事実は、最強者が最強である限り、人が望もうが望ままいが当然存続する。もし君が力に訴えれば、力の秩序は得られようが、その際はどんな約束事も無駄である。もし君が法秩序を望むなら、力に訴えるのではなく、言論に訴えねばならない。議論し、譲歩し、説得しなければならぬ。これこそが平和を得るための代価である。大して高いものではない。戦争は決して平和を確立しはしない。確かに平和の樹立が困難なことは私にも解っている。私はただ、力の行使は決して平和に近づかず、逆に平和から遠ざかるものだとしてだけいておこう。私はここで言葉の意味を正しておきたいだけだ。戦争状態を平和と呼んではならない。(「法と力」)

⑫ 否ということは決してたやすいことではない。暴力を用いて権力を罰する方がまだやさしい。だが誰でもすぐ気が付くように、これではまた戦争となる。このように怪物は到る所で口をあぐりとあけている。ここからあの受け身の諦めが生じる。しかし精神は別種の闘いを挑む。／ストライキでさえすでに強力なものといえよう。もしすべての人が精神的ストライキを始めれば、これにかなうものはない。だが、君が他人の始めるのを待つ限り、誰も始めはしないだろう。だから君が率先して始めるべきだ。華やかな光景や行進を眼にした時、特に勝利の報に接した時に湧き上る、あの人を酔わせる好戦的情念に戦いを挑むべきだ。この種のあらゆる陶醉に否というべきだ。(「否と言うこと」)

⑬ 最近、不滅の《パイドン》を読み返しながら、私は、選択を不要にするような決定的証拠の出現をいつまでも待ち受けている臆病な思想家のことを考えるのであった。もし我々が考える機械にすぎず、また、正義と平和が、他の純粹無垢な理念同様、疑惑に打ち勝ち、精神を支配する力強さをそれ自体で備えているとするなら、話ほうますぎるというものだ。だがソクラテスは決して奴隷根性を望まなかったし、また誰一人、「正義は最強なり、真理は最強なり」と述べるような嘆かわしい思想家を望まないだろう。(中略) だが、我々は判断を下す勇気を欠いているのだろうか。確かに口先だけでは十分ではない。／だが問題を熟視しよう。悪を是認せず、崇めないこと。悪を精神的に受入れないこと。未だ存在していないものの実現に向けて断固意志することが大切なのだ。長年の間我々の眼を事実に向けさせるために払ってきた、あのひ弱な精神の並々ならぬ努力に我々は気づくようになるだろうか。あらゆる面で食欲、尊大、矮小なこの実験器具的精神が我々を戦争に導いたことを、我々は自覚できるだろうか。あの戦争は彼らにとって自分たちの正しさの証明に他ならなかったし、我々にとっては処罰だったのだ。君たちにはあの意地悪な微笑の意味が捕えられるだろうか。さあ、わが友よ、意志せずに考えたりすることはもうやめるがよい。そしてまず大きな誓いをたてよ。なぜなら君が傍観し、待っているだけなら、それは賛成することだ。もし戦争に否と言うなら、それは断固として否なのだ。(「意志すること」)